

## あとがき

私の家の北側を西に向かって流れ、やがて太田川に注ぐ川を三篠川という。その川面を渡る風が身にしむ頃を避けて、しばらく休んでいた朝の川辺の散歩を、河川敷の菜の花が咲き揃う頃を見はからって、再開した。故佐保田鶴治先生の指導で、昭和四十五年四月に始めたヨーガ体操は、毎朝の行事として、一回も欠かしたことがなかったが、川辺の散歩とセットとなっていたので、体操だけでは、何か物足りない感じがしていた。一年の内の特定の時期だけであったが、生活のリズムに欠落部分が生じた感じを、どうすることも出来なかった。

川辺の道を歩きながら、まっさきに唇にのぼるのは、『方丈記』の冒頭の「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」であるが、この冒頭の流れるようなリズムは、「淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖すまと、またかくの如し」と転ぜられて、無常迅速の世の現実を納得させられてしまう。その代り、私の心を引いた冒頭のリズムからは見放されて、心とその余韻がのこるだけとなる。それはそれでよいのであろうが、私には、『論語』の子罕しかん篇の、

子在<sup>リテ</sup>三川<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、「逝<sup>ク</sup>者<sup>ハ</sup>如<sup>キ</sup>斯<sup>ク</sup>夫<sup>カ</sup>、不<sup>レ</sup>舎<sup>テ</sup>晝<sup>ノ</sup>夜<sup>ヲ</sup>」

の、いわゆる「川上<sup>せんじょう</sup>の嘆<sup>たん</sup>」として受け止める方が、自然におさまるように思う。「逝<sup>く</sup>」は、行って帰らない意である。「昼も夜も、一刻の止むときもなく、過ぎ去る。人間の生命も、歴史も、この川の水のように、過ぎ去り、うつろってゆく。」(吉川幸次郎著『論語』八朝日新聞社刊中国古典選所収▽による)まさに孔子の「川上<sup>せんじょう</sup>の嘆<sup>たん</sup>」のリズムに沿った訳文として、申し分がない。朝毎に、川辺を散歩しながら、論語の「川上<sup>せんじょう</sup>の嘆<sup>たん</sup>」に当る部分を、このように受け止め、観照することによって、私の想念の流れは、この川の流れとともに、あの渺茫たる「海」に受け入れられてゆくのだ、ということが、実感として私の内部に定着してゆく。そしてこれが、いつしか、私の思索の核となってきたことに気づいた。これまで出した正・続の随想集『河の音』から、その「河」を受け入れる「海」が、三番目の随想集の名称として、おのずからに決ってきた。

次に本書の口絵として、私の尊敬する芥川<sup>かき</sup>永<sup>ま</sup>氏<sup>し</sup>の一九七六年の制作「星<sup>ほし</sup>きく人」の写真を頂くことが出来たことは、私の今生における最大の喜びである。芥川氏は、新制作協会の会員であるが、私もその学長を勤めたことのある比治山女子短期大学の教授として、今日の美術科を育てて下さった方である。なお、印刷になるまでには、美術科の吉田正浪教授の懇篤

な配慮を賜わったことも、ここに記して謝意を表したい。

ついでながら、歌誌『地中海』（香川進氏主宰）の本年五月号に、松永智子氏の次の詠が載った。「残照」と題する一連七首の初頭におかれている。

ひとつひとつ星の消えゆく空の藍消えゆくもののひびきのこれり

全くの偶然であるが、松永氏の写す空の情景に、オーバーラップされて現れてきたような芥川氏の「星きく人」の立像に、私は強く心引かれるものがあつた。短歌と彫刻の相違はあるが、両者をこのように関連的に解釈するのは、鑑賞者の恣意であるとしても、私にとってお二人は、日頃敬慕している方であるだけに、偶然以上のものを感じたので、ここに付記した次第である。